

3726 地球のかおり 「白・緑・黄」(産経新聞)：状況

スペイン、アンダルシアの白い村。
イベリア半島、スペイン、ポルトガル、2ヶ月かけて
隅々まで体感してきた。最初のご紹介は、この作品。

6月のアンダルシアは、ひまわりのシーズン。
強烈に印象に残るのは、色彩、太陽と青空。灼熱の太陽、情熱の国。
スペインを表現する言葉は多い。

オリーブの野から、忽然と現れる白壁の集落。
スペインは、土地土地で独特の多様な文化を持つ国。
一口では語れない興味深い国という印象。

古い城や由緒ある修道院を国営ホテルに改装した
パラドールにも宿泊。巡礼の道も走破。
カスティーリア地方やアンダルシア地方、
地中海沿岸地方、北部スペインをくまなく訪ねて、その印象を強くした。

この作品は、実はラッキーな瞬間である。
六月七月のイベリア半島は、灼熱の太陽が照りつける。
旅人にとって、野外では日陰がなかなか見つからない。
水のある風景にもぶつからない。
のどの渴きを覚える。ほこりで汗まみれ。情熱の国というイメージ。

季節が変わると、曇天と雨ばかりの季節が多い。
南のセビーリアは、会津若松と同じ緯度。
マドリードは青森、北のサンタンデルは札幌。かなり高緯度の北の国。
そして、大陸性気候の乾燥地帯である。
木の国、石の国、土の国、環境も様々である。作品を見る限り美しい国。

良い事ばかり耳にして訪ねると、後味が問題だろう。
しかし、実に興味深い、奥行きのある国。
バスから通過するだけではわからない実感する国。
2ヶ月あまり、さまよったのが良かった。
日本からはるかに遠い憧れの国を訪ねられて超ラッキー。
私の旅の後味は最高だった。夢とロマンの国。

旅人と住人の感じ方は少し違う。
夏になると、南の地中海に大移動するのもうなずける。
なにしろ暑いという一言。
大地が、熱を吸収しないほど乾燥している。
木陰や水のある風景でもあれば良いが、なかなか見つからない。
土もしっとりという訳にはいかない。
逆に面白い側面もある。

日本との違いがなにしろ面白い。
歴史や伝統、見るもの食べるものは美味しく楽しい。
中でも人間に対する興味。
自然の景観に関しては、感性にもよるが、今ひとつという印象だった。
スペインの楽しみ方は、別にあるようだ。
それだけに、この作品はありがたくラッキーだった。

舗装されていない細い道を、
小高い丘の上まで上った。のどの渇きをおぼえる。
一口の水が美味しかった事が、この光景とともに思い出される。
スペインの六月、内陸の暑さは強烈。
それだけに、地中海との対比が心に響く。